

みおしえ

「この身は泡沫のごとくと知り、かけろうのようなはかな
い本性のものであると、さとったならば、悪魔の花の矢を
断ち切って、死王に見られぬところへ行くであろう。」(法
句経四六 中村元訳)

この法は、仏がサーヴァッティにおられたとき、陽炎
を瞑想の対象として修行する比丘について説かれた。かの
比丘は仏のもとで瞑想対象を決め、森にいり瞑想に努めた。
しかし、陽炎を見ても、暑い時に生ずる陽炎は遠くから見ると形
があるが、近づくと消えてしまう。この身自体も消滅する
から同じようなものだ。と陽炎を対象に瞑想しながら帰る
てきた。疲れた彼はアチラパティ河で沐浴し、岸辺の木
陰に座って休んだ。そこで河の水に大きな泡が生じては滅
するのを見てまた、「この身自体も同じである」と対象とい
うものを把握した。仏は香房から長老を「覽になり、比丘
よそのとおりで、この自体は、そのような泡や陽炎のよ
うに、生じては滅する性質のもです」と、この法を示さ
れた。長老は阿羅漢の境地に達した。

心の言葉
この身は泡沫のごとくと知り
南無妙法蓮華經と唱え
魔の花の矢の惑・業・苦を断て

(ダンマパダ金詩解説 片山一良参照)

お題目で成仏する十

文永十年(一二七三)流された佐渡において日蓮聖
人は観心本尊抄を述作された。
その中で「釈尊の因行(いんぎょう)・果徳の二法は
妙法蓮華經の五字に具足す。我等この五字を受持すれ
ば、自然に彼(か)の因果の功徳を譲り与えたもう。」
と述べられています。

原始仏教では八正道による修行によって成仏をめざ
しました。法華經では神のごとき久遠の釈迦牟尼仏が人
類を救済されると示されています。日蓮聖人は、この
信解脱、信仰による成仏の仕組みを觀心本尊抄でお示
しです。久遠本仏の功徳力なる為の菩薩行の功徳と成
仏した仏としての功徳力は妙法蓮華經の五字にそなわ
っている。したがって南無妙法蓮華經と妙法蓮華經の
五字を受持すれば、功徳の全ても頂きます。私たちが成
仏することが出る。と云うことになりません。南無妙法蓮
華經とは本仏釈尊に帰命し一体になること、私たちが、
心から南無妙法蓮華經と唱え信仰の力で釈尊の心と自
分の心を一つにしなれば、成仏できます。南無妙
法蓮華經と唱えてお釈迦様の心と一つにならば、仏
様のようになり、人を愛し、人を許し、ひとを生かす振
舞いをする。日常の心と振る舞いも仏様のようになり、
う。そうしたら、いつでもどこから見ても仏様のようにな
れるでしょう。

「妙覚の釈尊は、我等が血肉なり。因果の功徳は骨
髄にあらずや。」(觀心本尊抄)と日蓮聖人がお示しの
ように、最高の悟りを体現された釈尊は私達の血であ
り肉であり、仏の功徳は私達の骨髓となるのです。